

# 脳同期現象に基づく道徳的対話における 伝達感抽出の試み

下田 香織\*, 田和辻 可昌\*\*, 松居 辰則\*\*\*

## Extraction of Sense of Transmission in Moral Dialogue Based on Brain Synchronization

Kaori SHIMODA\*, Yoshimasa TAWATSUJI\*\*, Tatsunori MATSUI\*\*\*

### 1. はじめに

道徳教育には「学習者の道徳的心情を豊かにすること」が求められ、学習者が自分の心に問いかけ、悩む機会を創造することが重要であると考えられている<sup>(1)</sup>。一方で、道徳の授業において、学習者は教師が期待する、一般的に道徳であるとされる正答を察知し、自身の感情を偽った解答を述べる傾向があることが指摘されている<sup>(1)(2)</sup>。学習者が自身の感情を開示しないことで、教師による適切なフィードバックが生成されず、学習者が自分の心に問いかけたり、悩んだりする機会が消失することは、道徳教育の大きな課題だと考えられている<sup>(1)(2)</sup>。このような課題が指摘されていながら、指導の改善に至っていない原因として、道徳教育において学習者の自発的な感情開示の程度を検討するための評価尺度が存在しないことが挙げられる<sup>(2)</sup>。特に、指導方法の改善や学習者間での比較の必要性を踏まえると、従来の主観的な道徳観評価尺度に加え、学習者の感情開示についての客観的な評価尺度を提案することは、道徳教育の改善に有効であると考えられる。

また、話者による感情情報伝達場面では、伝達感(自分の話した内容が対話相手に伝わったと感じる程度)が高くなると考えられている<sup>(3)</sup>。感情開示の有無の評価が、道徳教育の効果を判断するうえで重要な

指標になるため<sup>(2)(4)</sup>、道徳的対話において伝達感評価を取り入れることは、重要であると考えられる。

これらの内容を踏まえ、本研究では、対面場面での自発的な自己開示と伝達感評価の関連の調査(実験1)、道徳観の変容と伝達感評価の関連の調査(実験2)、生体計測に基づく伝達感評価の可能性についての調査(実験3)を実施した。

### 2. 自己開示と伝達感の関連について(実験1)

これまでの伝達感研究は対面場面と非対面場面での比較研究が多く<sup>(4)</sup>、対面場面での伝達感の高低についての特徴を検討した研究は少ない。そのため、対面式の道徳教育場面で重要視される自発的な感情開示と、伝達感の関連は不明である。そこで、実験1では対面場面での話者による自己開示と伝達感の関連を調査し、道徳教育における伝達感評価の重要性を検討した。

#### 2.1 実験手続き

実験1では自己開示状況が異なる対話場面での伝達感評価を取得するために、対話課題2種(対話課題A:自発的自己開示場面、対話課題B:質問による自己開示場面)を作成した。実験参加者は2人1組になり、2種の課題の両方に取り組んだ。対話課題A

\* 早稲田大学人間科学研究科 (Graduate School of Human Sciences, Waseda University)

\*\* 早稲田大学グローバルエデュケーションセンター(Global Education Center, Waseda University)

\*\*\* 早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

受付日: 2020年7月6日; 再受付日: 2020年12月22日; 採録日: 2021年3月22日